

JIA

MAGAZINE

300 JANUARY 2014



建築家
architects

●特集 **建築・都市のパラダイムシフト—ライフスタイルの転換②⑩**

ライフスタイルの提案を含んだ新しい建築に挑戦

古市徹雄

●新国立競技場案を神宮外苑の歴史的文脈の中で考える
その後の経過

●2013年度「日本建築家協会優秀建築選100作品」

株式会社**建築家会館**です

JIA 館テナント募集中

JIA 館6階のテナントを募集しています。

- 6階1フロア(144㎡)。2分割も相談に応じます
- JIA会議やイベントに、雨の日でも傘なしでOK
大ホール、会議室を有する建築家会館が隣接し、またJIA館の1階建築家クラブ、本館1階クラブ・バーもご利用いただけます。
- 東京事務所としてのご利用にも最適です
地下鉄外苑前駅より徒歩約8分、JR千駄ヶ谷駅より徒歩約15分。
アクセス抜群の都心にありながら神宮の森にも近く良好な環境です。



株式会社建築家会館

<http://www.kenchikuka-kaikan.jp/>

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-16 TEL: 03-3401-6281 FAX: 03-3401-8010
E-mail: kenchikuka_kaikan@nifty.com

建築家のための保険・中途加入のご案内

JIA 傷害総合保険・JIA 所得補償保険

地震・噴火またはこれらによる
津波によるケガも補償

《天災危険補償特約付》

★毎月、中途加入を募集しています。

※個人の生活の安全を支えます。

※事務所所員のための福利厚生制度としてご利用いただけます。

※毎月15日締め切りで、翌月1日から加入となります。

《JIA指定代理店》

株式会社建築家会館

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前2-3-16 TEL: 03-3401-6281 FAX: 03-3401-8010

《JIA所得・傷害保険提携代理店》

株式会社安田システムサービス

〒163-1529 東京都新宿区西新宿1-6-1 新宿エルタワー 29F TEL: 03-3340-6497 FAX: 03-3340-5700

《引受保険会社》

株式会社損害保険ジャパン 営業開発2部2課

〒100-8965 東京都千代田区霞が関3-7-3 TEL: 03-3593-6453 FAX: 03-3593-6751



ジャンタル・マンタル(天文観測所)
(インド・ジャイプール)

インド北西部のラジャスターン州には魅力に富んだ建築・都市が多い。州都ジャイプールは街全体が赤いインド砂岩で作られているのでPink City、ウダイプールの建築群は全体に白い石で作られているのでWhite City、ウダイプールから北に行ったジョードプルは家屋の壁が青く塗られていることからBlue City、ジャイサルメールは金色に輝く様子を表しGolden Cityと呼ばれる。ジャイプールはラージプートのカチュワーハ一家サワーイー・ジャイ・シン2世によって18世紀に建設された。彼は王子の時からヒンディー語、サンスクリット語、ペルシャ語、アラビア語などを学び、科学の教育も受け、特に天文学の勉強に励んだといわれている。

彼は当時のインドの天体暦、天文表などが不正確なものだったために天文学の進歩の必要性を感じ、正確な天体観測機器を作りたいという強い願望を持っていた。

ジャイ・シンはペルシャ、ヨーロッパから膨大な数の書籍を取り寄せ、自らの宮殿内に図書館までつくり、さらに各地から天文学者たちを宮廷に招聘し、天文学の情報を集めていたといわれる。

全部で5つの天文観測所をつくったが、最初のものはデリーに建設し、やがてジャイプールの自らの宮殿の一角に最大の天文観測所ジャンタル・マンタルを建設した。

この天文台には石造りの観測機器が4つあるが、一番大きく最も重要な機器はサムラート・ヤントラで、ジャイ・シンが自ら考え出した。

中央に北極の方を向いた日時計の指柱となる巨大な石造りの三角壁が置かれ、両翼部には時分秒まで読める円弧を描く赤道儀、目盛環という測定器が作られている。

ジャイ・シンによって発明されたジャンタル・マンタルは、それまでの日時計にさまざまな改良が加えられ天体の赤緯や座標を測定するための精密な天文機器となり、正確な暦や天文表の作成に寄与した。

そのデザインは一見奇異な造形にも見えるが、これらの天文建築は測定に必要な最小の機能を形にしたものであり、他に不要なものは一切ない。

現代ではむしろ、3次曲面を用いた最先端のデザインのようにすら見えてくる。

(写真・文：古市徹雄)

CONTENTS 300 JANUARY 2014

002 《年頭所感》

より魅力的なJIAを目指して

日本建築家協会会長 芦原太郎

特集 建築・都市のパラダイムシフト ——ライフスタイルの転換 ②⑩

003 古市徹雄氏に聞く

ライフスタイルの提案を含んだ新しい建築に挑戦

011 新国立競技場案を神宮外苑の歴史的文脈の中で考える

その後の経過

013 2013年度「日本建築家協会優秀建築選100作品」

015 公益社団法人日本建築家協会 2014年度 本部役員候補者選挙について

016 JIA NEWS

016 理事会報告／2013年度日本建築家協会優秀建築選公開審査会を開催します

017 本部便り／正会員新規入会者／編集後記

《2014年 年頭所感》

より魅力的な JIA を目指して



公益社団法人日本建築家協会会長 芦原太郎

社会にとっても魅力的な JIA・会員にとっても魅力的な JIA

昨年は経済も少し上向きになり、2020年に東京オリンピック開催が決まるなど明るい兆しが見えてきました。

高度成長の時代のようにバラ色の未来を信じることは難しいとしても、私達建築家は将来ビジョンのもとに専門家として安心・安全で持続可能な環境づくりにむけて一つ一つ地道な努力を積み上げていくことが大切です。

2020年の東京オリンピックを契機にして、成熟社会の建築・まちづくりのあり方を示しながら建築・まちづくりを推進していきます。

建築の公共性〈社会にとっても魅力的な JIA〉

建築は地域の環境を構成する大切な要素であり、社会性・公共性を持った環境資産といえます。

建築関連5団体の建築・まちづくり宣言に唱われている以下の3つの環境、人々が生き生きと暮らせる安全・安心な生活環境、生産・経済活動を支える持続可能な社会環境、地域固有性を継承する豊かな文化環境のすべてに建築は密接に関わって、その環境を価値あるものとすることに貢献しています。

この公共的価値の実現が公益社団法人としての JIA の目指すところであり、会員が総力を挙げて具体的に公益活動を実践していくことで、社会にとっても魅力的な JIA となることを目指しています。

信頼される建築家〈会員にとっても魅力的な JIA〉

建築家は単なる技術者ではなく、プロフェッションの本質は建築づくりを通して公共的価値を実現させていくことです。

社会から建築家に対する信頼を獲得していくことが、会員にとっての JIA の魅力の第一になってきます。

建築への志を共にする仲間との活動や交流を通して、プロフェッションの本質を学び継承していくとともに、新会員制度による学生会員やジュニア会員など若い会員を建築家に育てながら、会員にとっても魅力的な JIA になることを目指しています。

ライフスタイルの提案を含んだ 新しい建築に挑戦

この連載が始まったのは2012年6月(281号)。これまでさまざまなゲストの方に古市編集長がインタビューを行い、これからの建築や都市の目指すものについて、皆さんの考えをうかがってきました。今回いよいよ最終回を迎えることになりました。そこで、今回はいままで司会を務めていた古市編集長ご自身に、パラダイムシフトについての考えを編集部からうかがいます。

3.11 を契機に出てきた新しい動き

——この「建築・都市のパラダイムシフト—ライフスタイルの転換」というテーマに取り組まれたきっかけについて教えてください。

古市●やはり、2011年3月11日が一番大きな起点になっています。それまで経済一辺倒でバーチャルなIT社会へと突き進んできましたが、3.11を契機に人と人の関係、利己性ではない利他性など、いろいろなテーマが出てきました。それまでとちがう何か新しい動きが出てくるのではないかということが、ひとつありました。

また、2009年から僕ら(千葉工業大学建築都市環境学科ブータン伝統住居実測調査研究隊)はブータンで調査をしていまして、Gross National Happiness (GNH=国民総幸福量)という考え方に触れました。その根幹にはブータンの伝統、自然を守っていく、西洋が作り上げ

たGNP (Gross National Product=国民総生産)で豊かさを競っていくという西洋型近代主義とは異なった考え方があります。それは、いままでのヨーロッパの価値観、分かりやすく言ってしまうとキリスト教の考え方、人間が神から自然を管理するように委託されているという考え方とは対極的なものです。極端に言えば、20世紀の近代主義を通じて、人間が自然を征服してしまうところまで来たと思いました。ところが、3.11の津波の襲来を見ると、とても自然は征服できるようなものではないと、誰もが感じたと思います。

もうひとつ、インターナショナルスタイルの建築で、自然を征服(コントロール)し、世界中のどこでも同じ建築をつくってしまうという考え方では、当然冷暖房に頼るしかありません。つまり近代建築の中でどんどんエネルギーを使って生活することになるのです。それも違うのではないかと考えていました。



実は1月に、『Towards Nature (自然に向かって) 一風・光・水・木・地・神』という本を中国で出版します。これは、まさにこの特集のテーマ「建築・都市のパラダイムシフト」に即した内容です。この『Towards Natures.』を考え始めたのは7年前でしたが、その途中でいろいろな出来事があって、そのたびに考え方が少しずつ微妙にずれて、手を加えているうちに7年経って、やっと出版することになりました。

3.11以降、我々の考えもずいぶん変わってきました。自然に対する畏怖、尊敬はアジア独特なものだと思います。この本では、西洋の人間中心主義的な考え方からアジアの自然崇拜型に帰ろうということを書きました。「Towards Nature」というのは、実は、ル・コルビュジエの“Towards an Architecture (建築をめざして)”からきています。「住宅は、住むための機械である」と彼は言いました。その反語で“Towards Nature”というタイトルにしました。

僕はこれまで、風、光、水、木、地などの自然を取り入れるための世界のいろんな英知を現代建築にどうやったら取り入れることが可能かを追求してきました。それらをずっと応用していくと、かなり現代建築が変わってくるのではないかと、パラダイムシフトしていくのではないかと思うのです。

この本の中で、僕が思うパラダイムシフトのキーワードをいくつか挙げています。それらの根底には、西洋近代合理主義とは全く考え方の異なる、むしろ今まで西洋に否定されてきたヒンドゥーでも仏教でも道教、アニミズムでもいいのですが、論理にはならない、自然とのあり方に目を向けてみようという考え方があります。

先ほど述べた5つの要素の他に、神というキーワードを入れているのもそのためです。本の中でいろいろと実例を紹介しています。世界のヴァナキュラー建築の紹介のほかに「移動して暮らす」「スモール(コンパクト化)」「農業」「江戸の生活」「木」「自然」それに「ブータンから学ぶ」などです。これらを総合して建築が大きく変わっていくのではないかと、そのことは僕自身がこの7～8年にわたってずっと考えてきたことなのです。

世界中の自然を取り入れる英知を見直す

———ということは、この特集を始めた直接の契機は3.11とおっしゃいましたが、それ以前から近代社会はこのままではいけないという危機感を持っていたらして、ずっと考え続けていたテーマだったのですね。

古市●そうですね。それが3.11で、より明らかになったという感じですね。

近代社会に対しては、ずっと危機感を持っていました。僕は1970年代の後半から丹下健三・都市・建築設計研究所で比較的海外の仕事を多く担当して、特に、中近東やアフリカ、東南アジアなど世界各地にかなり行きました。そうすると、世界にはいろいろな面白い建築がたくさんあることがわかってきたのです。まさしくバーナード・ルドフスキーの『建築家なしの建築』の世界です。



1月に中国の大連理工大学出版社より刊行される古市徹雄著『Towards Nature—風・光・水・木・地・神』刊行まで7年間をかけ、パラダイムシフトのテーマに基づいた建築・都市・環境に対する古市氏の考え方をまとめたもの320頁、英中併記、A4判

すると、どうも見ていくうちに、形だけではなくて、それらが生まれてきた経緯が面白いと思うようになってきました。たとえば東南アジアへ行くと、建物には大きな屋根が架かっていて、庇が急勾配で非常に大きいのです。それはもちろん、凄まじい暑さと雨を凌ぐためにそのような形態が生まれてきたのです。

日本でも、出雲に築地松^{つじまつ}という生垣がありますよね。これも厳しい冬の季節風から家を守るためのものです。こういうものや形も全部、自然との付き合いから生まれるので、そこに人類の英知が宿っているわけですね。

結局、近代主義は、たかだか100年で作り上げたようなものですが、これら人類の英知は何万年もかかって培ってきたものです。そういう英知をいろいろ見ていくと、僕は近代主義でそれらをずいぶん思い切ってバッサリ切ってしまったのだとつくづく感じます。それで、鉄とガラスとコンクリートの摩天楼をつくって冷暖房をして人工環境をつくり、世界中どこへ行っても同じ様式にしてしまいました。それが20世紀だったと思います。

その結果、どんどん僕らと自然との距離が離れてしまいました。極端に言えば、今まで自然に開いていた生活が、建物の中で冷暖房をして完全に閉じられてしまったのです。その一方で、エネルギー増大によるCO₂の拡大という問題が出てきました。その結果、地球が温暖化して、いま地球の異常気象が起きているわけです。ここ数年、以前とは明らかに天候が変わっています。

つまり、いままでの生活を続けていたら、もう、地球はもたないわけです。

多方面の分野の方たちの貴重な話

———この特集を始めたのは東日本大震災から1年3ヵ月経った2012年6月です。その間、いくつかの復興事業は進行していましたし、雑誌などでも特集が組まれたり、書籍も数多く出版されました。あえてこの時期から始めたのには、何か理由があったのでしょうか。

古市●それまで『JIA MAGAZINE』では「プロポーザルを考える」という特集に取り組んでいました。これはこれできちんと決着をつけなくてはならないというのがあったのです。ただ、「パラダイムシフト」というテーマについてはずっとやりたいたと思っていましたね。

——— 3.11直後ではなかったことで、復興の様子など



第1回 281号(2012.6)
月尾嘉男氏
「もう一度原点に帰って人類の進歩を見直そう」



第2回 282号(2012.7)
山崎亮氏
「モノが過剰な時代に建築家にできることは何か」



第3回 283号(2012.8)
ビジョイ・ジェイン氏
「その場所の材料と工法と自分たちの手で建物をつくる」



第4回 284号(2012.9)
井口浩氏
「建築家だからこそ次世代ビジョンを提示できる」



第5回 285号(2012.10)
フクシマからの提言……
2030原発ゼロ—電力に頼らない新しい生活—

もご覧になった上で皆さんにお話をうかがうことができましたし、かえってすごくいい時期に始めたのかもしれない。

古市●そうですね。たとえば伊東豊雄さんは「みんなの家」のプロジェクトを手掛けていらして、ある程度そのような形になったものがあつた上でお話が聞いたことが良かったと思います。

3.11直後にこの特集のテーマと関連するようなライフスタイルのパラダイムシフトについて、いろいろな方が発言していたのですが、ひとつの何かに対して、どうしようというような、割とその場だけの話が多かったのです。僕がそれまで考えてきたことは、自分の経験ももにしていることでしたし、もう少し総合的で地球規模の話だったのです。だから、この特集を始める時期については、そんなに焦らなくてもいいと思っていましたし、むしろ、じっくりやりたかったのです。

お話をうかがう方も、なるべくこういう視点で話していただける人がいいと思ってまして、第1回は月尾嘉男さんをお願いしたのです。月尾さんはずっと世界中の先住民族を訪ねて、彼らの先人たちの英知を見ながら、それをどうやったら現代に生かせるかという話をよくされています。そういうことから、最初に登場していただきました。

——登場いただいたゲストの方々は今古市さんご自身が選ばれて、ご自身でコンタクトもとられてきました。その幅広い人選のポイントについて教えていただけますか。

古市●この特集に取り組む一方で、『Towards Nature』の原稿をずっと書いていましたから、やはりこれがベースになっているのです。先ほど挙げた僕が思うパラダイムシフトのキーワードがいくつかありますから、それに即した方、その分野の専門の方を考えました。

多分野の人のお話が聞けると面白いだろうというのはありました。

——19回の中で、古市さんにとって、目から鱗が落ちるようなお話はありましたか。

古市●刺激的で貴重な話がほとんどでしたが、田中浩也さんの新しいものづくりについての話は、とくに新鮮でした。まさに田中さんは、IT技術のテクノロジーで時代の最先端をいっていますが、実は彼はバナキュラーなものに対してものすごく興味を持っていて、たとえば、3Dプリンターのような機械をアフリカの真ん中に持ち込んで、彼らのクリエイティビティを引き出そうなんていう話は、今まで考えたことがなかったですね。「ああ、こういう考えがあるんだな」という新鮮な驚きがありま

した。僕はハイテク&トラディションということばをよく使うのですが、まさに彼は、ハイテク&トラディションの最先端にいると思います。

しかも、たとえば茶碗を手作りすると、それに対して自分の愛着が生まれ、ずっと使い続ける、だからこれは環境にいいんだという話などは、ハイテクでありながら、一方で愛情や愛着という情緒的な話やローカルな話がつながってきて、まさにパラダイムシフトでした。こういう人が、ひとつ時代を切り開いていくのだろうと思いました。

——このテーマが決まった時に、最初「パラダイムシフト」というテーマは、前回の「プロポーザルを考える」のような具体的なものではなく、漠然としていてちょっと難しいテーマだなと思っていたのです。ところが1年8ヵ月続けてきた中で、だんだんこの言葉がJIAの会員の皆さんの中でも浸透してきたように感じますが、いかがでしょうか。古市さんのところにたくさん反響が寄せられたとうかがいました。

古市●パーティーなどでいろんな人と話すと、ものすごく楽しみにしているとと言われることが多いんですよ。やっと『JIA MAGAZINE』を読む気になったとか。また、読んで新しい知識を得ることができたという人が結構多かった。嬉しかったですね。

特に後半に登場していただいた安藤直人さん、田中浩也さん、鬼頭秀一さんは、おそらく建築家にはあまり知られていない方たちでしたから、とても新鮮な話題を皆さんに届けることができたと思います。

——建築家以外の方からお話をうかがうことで、建築家の方の今まで持っている常識や考え方が変わるということがありますよね。

古市●かなりあると思います。

ブータンでの発見

——インタビューの際にしばしば、古市さんからブータンのお話が出ました。

古市●我々の競争社会ではGNPの考え方がベースにあります。GNPが多いほど豊かな国であるというのが、20世紀ずっと僕らの時代の考え方です。それに対してブータンでは、GNPではないGNHだと言い出したわけです。僕はこれは、何か新しい価値観を生むのではないかと考えています。

実際、ブータンではいろんなことを実践しています。たとえば小学校や中学校で、生徒を競争させないように、



第6回 286号(2012.11)
フクシマからの提言……
2030原発ゼロ—電力に頼
らない新しい生活—その2



第7回 287号(2012.12)
重村力氏
「不連続統一から学ぶ—
吉阪隆正再考—」



第8回 288号(2013.1)
原広司氏
「近代の均質空間を超える
新しい空間を模索する」



第9回 289号(2013.2)
伊東豊雄氏
「日本から、そして地方から
21世紀のモデルをつくる」



第10回 290号(2013.3)
中沢新一氏
「グローバルとバナキュラー
が共存する社会をめざす」

できるだけ全員が制服を着るようにしています。不幸は競争意識からくるという考え方がブータンにあるのです。たとえば自分は携帯電話を持っていて、友人はiPhoneを持っていたりすると当然欲しくなる。子どもが母親に「欲しい、欲しい」と言い出して、買えないと不幸なわけです。洋服も同様です。学校で隣の子がすごくいい洋服を着ているのに自分はボロをまとっていると、不幸だと感じてしまう。ところがブータンでは、とにかく全員同じものを着なさいというわけです。それも、民族の伝統的なものを着て民族的な誇りを持つ。同時に競争をさせないこともひとつの方法だと思うんですね。

——GNHの考え方は、いつ頃からあるのでしょうか。

古市●ブータンはずっと鎖国をしていて1970年に国を開放しました。その際、周辺のインドなどが当然入ろうとしたわけです。自分の国を工業化してしまうと、利益だけ全部吸い上げられてしまい自分たちは完全に駄目になると国王は察したのでしょうか。そういう国にはしたくない、それでGNHを宣言したのですね。

それも自分たちを守るための一種のバリアですね。自分たちはGNPの社会には入らない、工場もつくりませんと宣言したのです。そうすると海外も、あの国へ行っても何のメリットもないと思って介入してこないわけです。そういう戦略で来たのですね。

昔からそういうところはそこそこ注目されていましたが、21世紀になって地球環境がガタガタになったり、いま先進国における自殺が深刻な問題になって国連でも議論されたときブータンで自殺者がほとんどいないという話になり、いきなり注目され始めたのです。

ですから、GNHの考え方もパラダイムシフトのひとつの大きな要素になると思います。つまり、僕らの社会はずっとGNPを追求して突き進んできましたが、もうお金じゃない、GNPではないんだということだと思えます。

——古市さんは、ブータンとの関わりについて、以前『JIA MAGAZINE』281号にも執筆されています。2008年に講演を依頼されたのがきっかけと書いていらっしゃるんですが、その前からブータンがGNHを打ち立てていることはご存じだったのでしょうか。

古市●そうですね、ブータンとの関わりはJICAでの講演がきっかけです。でも当時はGNHのことはあまり知りませんでした。

——最初いらっしゃる時の印象はいかがでしたか。

古市●感動しましたね。これまでいろんな建築家と一緒にきましたが、必ず全員感動します。ブータンの人は

みんなニコニコしているんです。日本だと特に都会では笑顔がなくて、すれ違ってもみんな睨んだような顔をします。ところがブータンへ行くと、とにかくみんなニコニコしていて、その笑顔を見るだけでもちょっと救われるのです。それはどういうことかということ、自然体なのですね。僕たちグローバル化の中の競争社会で生きる人間は自然体にはなれません。いつも構えていなければなりませんから知らない人にニコニコなどできません。というよりも失ってしまったという方が正しいかもしれません。

そのころから僕は『Towards Nature』について考えていて、「自然」がずっと、ひとつのキーワードだったのです。ですからブータンに行った瞬間に、「ああ、ここはまさに自然と一体じゃないか」と感じました。何かここにひとつヒントがあるとピンときたのです。それは、我々が完全に失った社会なんです。自然と一緒に生活することは、なかなかもう日本ではありませんが、ブータンではまだ、ガスもない、電気もそんなにふんだんに使っているわけではありません。もちろんその時「パラダイムシフト」という言葉を思い浮かべたわけではありませんが、何かヒントになりそうだという直感がありました。

福島で生まれ育つ

——古市さんご自身のことをうかがいます。ご出身は福島県ですね。古市さんが生まれ育ったのは、どのような環境だったのでしょうか。

古市●まさにブータンと一緒にですね。

——ではブータンに行かれたときに、何か郷愁のようなものを感じられましたか。

古市●あったのかもしれませんが。僕の故郷は典型的な日本の農村地帯です。僕の小学校時代の生活が、実はブータンにそのまま残っている感じです。考えたら、あの頃の日本人も、みんなニコニコしていました。自分の家に鍵をかけるなんて絶対にしなかった。他人の家でも自由に出入りできた。ブータンもそうなんです。

——福島のどちらでしょうか。

古市●棚倉町といって一番茨城県に近いほうです。とりたてて特徴はありませんが、山が多くてきれいな川が流れていました。僕らの小学校時代はほとんど勉強なんてしませんでしたね。先生は面倒くさいと「きょうは自由に遊んでこい」と言って、僕はグラウンドでワーツと遊んでいるんです。夏休みなんかは、ずっと川に行ったきりで、釣りをやっていました。冬になると、自分で木を利用して小屋をつくって、そこで餅を焼いたり。



第11回 291号(2013.4)
竹内昌義氏・山代悟氏・中村拓志氏
「環境・エネルギー・コミュニティ 仕組みを変えるデザインの力」



第12回 292号(2013.5)
隈研吾氏
「閉塞状況を突破する力 アウトローのエネルギーに期待」



第13回 293号(2013.6)
塚本由晴氏
「長い時間の流れの中で「いま」を考える」



第14回 294号(2013.7)
横文彦氏
「モダニズムのあとに来るもの 拡がった多様な可能性」

ブータンもそうですけれど、僕らが子どもの時は祭りが非常に多かったのです。祭りといっても小さいものですが、子どもは田んぼで家をつくって、そこで田楽をつくって街に売りに行く。すると子どもは神の使いでそれは神様の食べ物だと言ってみんなが買って、それが子どもの小遣いになるわけです。

——古市さんは、どうして建築家になろうと思ったのですか。幼い頃の生活に何かきっかけがあったのでしょうか。

古市●子どもの時は建築家になるなんて全然考えていなかったですね。建築家になろうと思ったのはかなり遅いんです。もともと理系で、東大に落ちて予備校に通っていたら、僕のすごく親しかった友人が『新建築』なんかを読んでいて、いちいち僕に見せるんです。

そのあと受験して、僕は最初は数学科にいたんです。そしたらなんか面白くなって、もう一回東大を受験しようとしたら、今度は入試が中止になったんです。そこで早稲田に戻ろうと思いました。簡単に転科できると思っていたのですが、入学試験を再度受けさせられました。早稲田の場合は最初から専門を決めなければならないのです。それで先ほどの僕の予備校の友人に相談したら、「建築しかないだろう」なんて言うんです。『新建築』を見たら面白そうなので、「じゃあ、俺も建築をやろう」と、その時に初めて考えました。

卒業設計は地域性を意識した漁業集落

——実際に建築科に入っていかがでしたか。

古市●早稲田の場合、高校時代から建築を勉強しているような人や、家が設計事務所をやっている人達がいるんです。彼らはまかせていて、大学に入った頃から設計もすごくうまいんですね。僕がだんだん自信をつけてきたのは大学3年の末くらいでしょうか。それまでは、とても勝てないと思っていました。4年生の時に漁業集落をテーマに選んで卒業設計を1年くらいかけてかなり一所懸命にやったんです。その卒業設計も、いま考えると何かパラダイムシフト的でしたね。

——敷地はどこを想定していたのですか。

古市●志摩半島の大玉町波切、ここがまたいい集落なんです。

——その卒業設計をやられたのは、いつ頃ですか。

古市●1972年から73年です。その時に、地域性のようなことをすごく意識したんですね。

——でも、当時は万博が終わり、モダニズム建築全盛期、高度成長期の真っ最中だったのではなかった

でしょうか。

古市●そうですね。だから周りは、たとえば東京の街の開発とか、すごく近代化に傾倒していたのが多かったですね。当時皆はハイテクのまさに最先端をいくようなテーマに目が向いていましたが、僕だけひとり漁村に行ってやっていたのです。夏休みの約1ヵ月、後輩10人くらいと漁師の家を借り切って皆で自炊して測量したり、調査したりして。

——それはどうしてだったのでしょうか。ほかの人たちとはちょっと違ったところに視点を向けてみよう意識されたのでしょうか。

古市●都会のものがあまり好きではなかったんですね。また、それらをやってもみんなに勝てないだろうという思いもありました。こっちは田舎者だから都会のやつがつくるような格好いいものはやらないぞ！というのがありました。自分には田舎で育ったベースがありましたし。僕は山村生まれなので海がいいなと思って海にしたんです。だから卒業設計も、なんとなくローカルな感じでちょっと鈍くさいんです。それに対してみんなは近代的でしたね。

——その頃、すごく憧れていた建築家の方とか、いらしたのでしょうか。

古市●思い出さないですね。特にこの人というのは、あまりいなかったです。

——卒業設計で研究室の先生の指導はあったのでしょうか。

古市●池原先生にはたまに相談しましたが、ほとんど自分で考えて進めていましたね。いまの学生は「指導、指導」というのです。先生が気に入らないことをしちゃうぞという恐怖感があるのでしょうか。だから、「これでいいですか」って来るのです。そういうことは、僕らはまったくなかったですね。徹底的に好きなことをやろうと思っていました。一所懸命にやった甲斐があって、卒業設計で最優秀の村野賞をもらうことができました。それで初めて「やれるな」と思ったのです。それまで、東京の連中は格好いいものをつくって、こっちはいつもダサイものをつくってきたわけですから、これからダサイところを徹底的に追求しようと思いました。

——そのスタイルは今でも貫かれているのでしょうか。

古市●変わらないですね。自分の設計も全部それで説明しています。一貫してヴァナキュラーな考え方ですね。

——古市さんのそういう考えはどこから来ているのでしょうか。

古市●それは子どもの時の環境でしょうね。僕はものすごいガキ大将だったんです。僕の家は、比較的裕福なほ



第15回 295号(2013.8)
安藤直人氏
「自由な発想で木を活かし
新たな建築を」



第16回 296号(2013.9)
坂茂氏
「21世紀の建築は仮設でい
い」



第17回 297号(2013.10)
王澍(ワン・シュ)氏
「あえてアマチュアの技術
にこだわって建築をつくる」



第18回 298号(2013.11)
田中浩也氏
「新しいものづくりの形が
世界を変える可能性も」



第19回 299号(2013.12)
鬼頭秀一氏
「自然をマネジメントして人
間との新たな関係をつくる」

うでした。それで勉強はしないで割と自由でした。朝遊びに行くと、たいいて夕方まで帰らない、昼は自分で魚を釣って焼いて食べるというような生活をしていました。それがその後の僕の考え方や生き方のベースになっているのかもしれないね。

世界を飛び回った丹下事務所時代

——丹下さんの事務所にはどのようないきさつで入られたのでしょうか。

古市●卒業したあとに大学院に2年間行きました。池原研究室です。修了後研究室に残るはずだったのですが、いろいろあって3月末くらいにその話がなくなってしまったんです。すでにその時女房と婚約していましたから途方に暮れてしまって…。結婚式が5月3日にもう迫っていて、結婚式で「新郎は無職で」なんてことになったら格好がつかないわけです。そしたら高田馬場で、建築家の渡邊洋治さんとばったり出会って、たまたま丹下事務所のスタッフの岩田隆さんと一緒にいらしたのです。渡邊さんに「なんだ、浮かない顔しているじゃないか」と言われて事情を説明したら、「じゃあ、この岩田君のところへ行きなさい。丹下事務所だ」と言われて、すぐ入れてもらいました。

——その頃、丹下さんは超有名建築家ですよ。それまで、丹下さんについてどのように思っていたのでしょうか。

古市●ちょっともう古くさいかなという感じはありましたね。

——古市さんが入られた時、丹下さんはどういった時代だったのでしょうか。

古市●東大を辞められて、ちょうど大阪万博が終わって、国内の仕事はそれほどなくて、海外の仕事が始まった頃でした。それは、僕にとってはものすごいラッキーなことでした。僕はそれに便乗して、ずっと海外へ行っていたのです。

——皆さんあまり行きたがらなくて下を向いていらっしゃるけれど、古市さんは進んで手を上げたとおっしゃっていました。

古市●そう、自分から「行くぞ」と言って。卒業設計のときもそうでしたが、本能的にそういう僻地というか、都会じゃない、ヨーロッパじゃないという意識がものすごくあるんです。昔からヨーロッパも根本的には全然好きじゃないんです。なんか格好をつけているようで。僕は格好をつけているのが嫌なんです。

——それまでに海外にいらしたことはあったのでしょ

うか。

いいえ、ありません。初めて行った海外がサウジアラビアですからね。ジェッダの空港はいまは巨大ですが、当時は木造の掘っ立て小屋のような建物で、いきなりそこにひとりで巨大な模型を持って降りたって茫然としたことを覚えています。丹下先生は英語もできない若造を海外に平気で行かせるのです。「現地に行けばなんとかありますから」と言って、気にされないんですよ。パスポートを出して戻ってくるのに2時間待って、それも投げてよこす。衝撃的でした。サウジアラビアの後、カタールに行き最初2週間の予定がトラブって5ヵ月になり、契約や仕事の内容のことでアラビア人とケンカしてよっぽど帰ろうと思いましたが、おかげでずいぶん強くなりました。

——ほかにはどの辺りの国にいらしたのでしょうか。

古市●結構長いのはカタールやシリア。クウェートでも仕事をしましたね。中東ではイエメン、イラク、アフリカではナイジェリア、ケニア、あとコートジボアールなども行きました。マラリアにかかったり、大変なこともいろいろありましたが、貴重な経験をしましたね。

——東京へのコンプレックスや反発のようなものはあったのでしょうか。

古市●これまた面白くて、反発というよりも、田舎にしながら東京をものすごくバカにしていたんですよ。僕の祖父が面白い人で、「江戸っ子というのは、しょせん貧乏人の集まりだ」とずっと言っていたんです。「徹雄、東京へ行ってもひるむな」と。かつて地方のお金持ちは、東京の人よりも、はるかにいい生活をしているわけなんです。だから、コンプレックスとは全然ちがうのです。だからといって優越感でもないし、何というのか、やっぱり自然のほうがいいんだ、おらが村のほうがいいんだという感じでしょうか。

——でも、地元で設計事務所をつくらうという考えはなかったんですね。やはり日本というよりも視点は世界だったのでしょうか。

古市●僕は大学時代に吉阪隆正先生の薫陶を受けたのですが、吉阪先生は世界人なんです。それこそアフリカから何から、世界中を回っていて、酒を飲むとそういう話をいつもしてくれるんですよ。彼は登山家ですから、世界の高峰をほとんど登っているわけです。建築家というよりも、むしろ旅行家であり思想家なんですね。先生から「アフリカはいいぞ」とか、そういう話をずっと聞いていて、それも頭のどこかにあって外国に行きたいと思っていたのです。それで丹下事務所に入ったら、たま



ブータン調査

たま海外の仕事が始まって。「海外に行きたい」というのは、そういうことがあったのですね。

——古市さんが編集長になられてからずっと、『JIA MAGAZINE』の表紙の写真は古市さんが撮影されたものを掲載してきました。それらにヨーロッパ近代建築の写真はまったくなくて、それこそ人類の英知でつくられたようなヴァナキュラーな建築ばかりです。それらは丹下事務所にいらっしゃった時に撮られたものも多いとうかがいました。でも丹下さんは、20世紀のモダニズムの旗手でいらっしゃったわけですね。

古市●そう、近代主義の先頭を走った人ですね。

——けれども古市さんは、丹下さんの事務所にいらしゃっても、丹下さんの考え方に心酔して100%それを受け入れるというのではなかったのですね。それはどうしてなのでしょう。

古市●僕はナイジェリアの新首都の仕事で合計3年間現地にいました。そうすると、現地の伝統的な生活やデザインを取り入れてほしいというような、現地の人のいろいろな要望があるのです。実際にそこで僕は生活していますから、エアコンを使わないような現地の生活の工夫を設計に入れようと思うわけです。当然、丹下先生の考え方とはちがう部分もありますが、それらを丹下先生に説得しながら、僕が担当したものに対しては、地元の素材や考え方、ライフスタイルなどを、できるだけ入れてきました。現地のいろいろな建築を見て、実際にそこで生活すると、単に鉄とガラスとコンクリートの建築をバーンと建てることに抵抗があるわけです。昔ながらの生活のアイデアは、やはりものすごくそこに合ったものなのですね。

だから、現地の人たちの住まいや生活をしょっちゅう見に行っていました。卒業設計の時の1ヵ月合宿して漁村の人の生活をずっと研究したスタイルは、アフリカへ行っても変わりませんでしたね。

——設計の際に丹下さんとの戦いもありましたか。

古市●当然ありました。ただ、丹下先生はもともと伝統論をお持ちで、海外でも丹下先生の作品自身が非常に日本的という評価があるのです。つまりもともと、そんなにバリバリの国際様式ではないんです。だから僕が現地で知ったこういう話をすると、それほど抵抗なく受け入れてくれました。ただし、そのままではなく、それを自分のデザインに変えていくのです。丹下先生にとって、納得できない形のもの、そこに近代の感覚を入れていくということを結構やられていました。



M 縄文博物館

21 世紀の建築のすがた

——19回連載を終えて、新たな発見や、ご自身の設計活動の中での考え方や設計スタイルに影響がありましたか。

古市●何点かありまして、ひとつは、自分が今までずっとやってきたことがそんなに外れていないという自信のようなものができました。再確認という感じですね。自分がやっていたもの、考えてきたことに対して、少しずつ肉付けができました。それはかなり感じています。

——古市さんご自身にとって、この特集を19回続けられたということは、プラスになったのでしょうか。

古市●非常にプラスですね。大きな財産です。この特集を続けている間、常にこのテーマが頭のどこかにあって、次はどの人に何について聞こうかなとずっと考えてきました。人を選ぶ場合にはかなりいろんな本を読んだり調べたりしましたし、そういう意味でも、非常に「考える」という機会が増えました。

——これからのご自身がつくれる建築のスタイルもそうですが、これから21世紀の建築や都市に望むことを、具体的にお願いします。

古市●21世紀は、できるだけ自然に開いた建築をつくっていくべきだと思います。

いまソーラーパネルや風力発電などの代替エネルギーとよばれるものが奨励され盛んにつくられていますが、それはあくまでも現在のライフスタイルや消費するエネルギー量は変えないという発想なんです。冷暖房は続けてそのエネルギーを代替で賄うのでは本末転倒ですし、何も解決しません。そのうえ代替エネルギーをつくる装置のためにCO₂をすごく放出しています。それが根本的な問題だと思います。僕がずっと一貫して言っているのは、エネルギーを減らそう、つまりライフスタイルを転換しようという考え方です。

もうひとつは、世界の人口がものすごい勢いで増えています。2013年現在で約72億人、2050年には約90億人を突破するといわれています。1960年には約30億人でしたから、50年で2倍以上、凄まじい勢いで増えているんです。

つまり、ライフスタイルを変えていかないと代替エネルギーで賄うだけでは、とてもじゃないけれどももちません。そのためには、冷暖房をして部屋に閉じこもるのではなくて、窓を開けて外から涼しい空気を入れる。そのようにライフスタイルを変えていかないと地球は追いつかないと思います。

——それが、苦痛ではなくて、楽しみに変わるような仕掛けを建築家が率先してつくっていかないといけないのかもしれないですね。

古市●そうですね。ライフスタイルの変化を唱える以上は、ただ空間だけつくってもしょうがない。こういう楽しみ方があるとライフスタイルそのものをデザインして提案することが大事ですね。それがこれからの建築家の担うべき役割になるでしょう。

——ゲストに来られた方も、建物をつくり続ける時代は、もう終わったのではないかと、そうなると、建築家の役割が変わってくるのではないかと話されていた方が何人いらっしゃいました。

古市●建築家の役割もかなり大きく変わってくるでしょうね。おそらく、大きな建物をつくることは、かなり減ってくるでしょう。また新築のものをつくることから、いまあるものをどう利用しようかということに変わってくるでしょう。いまリノベーションを盛んにやっていますが、その現状は建具や仕上げ、設備などを新しくするだけのものが多いですね。建築の根本的な改革までしていないように感じます。やる以上は、たとえば冷房を使わないような構造にするとか、そこまでやっていくのがこれからのリノベーションだと思います。建築のつくり方自体も変えていかなくてはならないと思います。パラダイムシフトというのはまさにそこで、それでは冷房を使わない、電気照明はなるべく使わないようにすると建築が変わってきます。

我々建築家がこういう楽しみ方があると生活の仕方を提案する場合、これは建築家だけではできなくていろんな人とのコラボレーションが必要だと思います。いろいろな専門家が集まった「ライフデザインオフィス」ができるかもしれませんね。

いままでにない新しい建築を

——いつも古市さんは、丹下さんに言われたとおっしゃっていますが、若い建築家や若い人を育てることにとても力を入れていらっしゃいます。若い建築家に対して、何かメッセージをお願いします。

古市●やっぱり海外に出ることは大事だと思います。日本の地方でもいいのですが、ただ、日本の地方は全部均質化してしまって、東京とあまり変わらないですからね。自分の知らない世界を見るというのは大事なことです。現地の気候も実際に体験しないと分からないですから。湿度や気温なども自分で体験することが重要です。

——いまは、世界中のどこにいても同じ仕事ができる時代になってきました。

古市●理想はそうです。本当は、福島あたりにいて、山小屋のようところで世界を視野に入れた仕事をするのが一番理想です。アメリカは昔からそういう事務所が多くて、すごい僻地に建築家がいるんですよ。

たとえば、スペインのRCRアーキテクトはバルセロナから100kmほど離れたオロットという小さな町に事務所がありますが、そこで世界中の仕事をしているんですね。そういうことを日本でできないのかと思います。

日本には「東京あるいは中央の建築家」と「地域の建築家」を区別するような独特の傾向がありますね。地方を拠点にして世界を相手に仕事をする建築家も少しずつ出てきていると思いますが、その辺を今後、若い人が変えてほしいです。地方の建築家の方も、地元だけではなく東京や他の地域、世界を視野に入れてほしいですね。

——それは、全国のJIAの会員の皆様へのメッセージになりますね。

3月で千葉工業大学を定年退職されるとかがいしました。『JIA MAGAZINE』の編集長も次号で終了します。これからは設計活動に専念されるのでしょうか。

古市●設計一本ですね。あまり数もつくらずに、誰もつくったことがないような、「あいつはアフリカにいたから、ああいう形ができるんだ」みたいなものに挑戦したいです。もちろんライフスタイルの提案も含めてです。海外にあるものをそのままつくるのではなくて、向こうの持っている知恵を生かすところな形になってしまうというような、その場所の空気に合ったものをつくりたいですね。それは結構面白い形になると思います。

1988年に事務所を始めて25年経ちますが、ひたすらずっと走り続けてきて今まで休む暇がなかったのです。4月から大きく環境が変わりますから、そこで自分のつくるものもガラッと変えていきたいという願望があります。

一番最初に、Super-Mini Houseという、江戸のしつらえの、江戸の長屋を改造したような15㎡の住宅を、僕の田舎に一户つくろうと思っています。それはライフスタイルの転換の提案を含みます。

またいままではRC造で設計することが多かったのですが、RC造+木造、鉄骨造+木造などのように、木造を中心にやっていきたいですね。木造でも日本の伝統工法ではなくて、いままでとちょっと違って風が入るからこういう木造なんだというような、完全に新しい木造建築をつくってみたいと思います。

——ぜひ拝見したいです。古市さんのこれからの活躍を楽しみにしています。

今日はこの特集の最終回にふさわしいお話をしていただきまして、ありがとうございました。

古市編集長、お疲れさまでした。

(2013年12月12日 古市徹雄都市建築研究所にて収録)

(聞き手：南口千穂(南風舎))

古市徹雄 (ふるいち てつお) 建築家、都市計画家

福島県生まれ

1975年 早稲田大学大学院建設工学科修了

1975～86年 丹下健三・都市・建築設計研究所 (世界各地に滞在・訪れた国は100か国余)

1988年 古市徹雄都市建築研究所設立

2001年～ 千葉工業大学工学部建築学科教授 国内外の多くの大学で教鞭をとる

著書：『世界遺産の建築を見よう』(岩波書店)、『風・光・水・地・神のデザイン』(彰国社)、『Towards Nature—風・光・水・木・地・神』(大連理工大学出版社)

作品：花巻体育館、宮沢賢治イーハトーブ館、六花亭ホール、那珂川水遊園、九品寺本堂・納骨堂、屋久杉自然館、等

新国立競技場案を 神宮外苑の歴史的文脈の中で考える：その後の経過

今回は新国立競技場に関して起こった出来事と、これまでの一連の流れを『JIA MAGAZINE』編集部でまとめました。

年月日	事 項
1926	神宮外苑は崩御した明治天皇をたたえるため、内苑である明治神宮とともに整備され完成。聖徳記念絵画館を中心として、明治記念館、運動場、野球場などの施設がつけられた。東京で初の風致地区に指定され、その後景観を守るため開発が規制された。国立競技場の前身「明治神宮外苑競技場」は1924年10月に完成。
1931.10.28	東京市議会で東京オリンピック開催が満場一致で採択。主会場には、東京府荏原郡駒沢町（現・東京都世田谷区）の駒沢ゴルフ場の跡地に計画する競技場群、および明治神宮外苑を充てることが決定する。
1936.7	IOC（国際オリンピック委員会）総会にて東京が1940年オリンピック開催地に決定。その後は東京開催準備が進行。明治神宮外苑に10万人規模のスタジアムを建設することが計画されるが、明治神宮外苑を管轄する内務省神社局が反対したため、駒沢にメインスタジアムを建設することとなる。
1938.7	日中戦争等の影響により日本政府は東京オリンピック実施の中止を決定。1940年大会の代替地として、ヘルシンキが予定されたが、第二次世界大戦の勃発によりこちらも中止。
1956	明治神宮外苑競技場がアジア競技大会と国民体育大会の会場に決定。明治神宮から文部省に譲渡され、現在も残る新設の「国立競技場」が整備された。1957年1月に起工し、アジア大会前の1958年3月に竣工。
1959.5.26	IOC総会にて東京が1964年オリンピック開催地に決定。国立競技場はメインスタジアムとして使用されることとなりスタンドの増築が行われることになる。
1964.10	第18回オリンピック競技大会が東京で開催。国立競技場は開閉会式、陸上競技、サッカーの決勝と3位決定戦、他に使用される。
2011.7.16	東京が2020年オリンピック・パラリンピック競技大会への立候補を表明。
2011.9.15	東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会設立。
2012.2.16	東京2020オリンピック・パラリンピック招致委員会が大会の開催基本計画を発表。国立霞ヶ丘競技場を8万人収容のスタジアムに改築し、開閉会式、陸上競技、サッカー決勝戦、ラグビーの会場とすることを正式に発表。
2012.3.6	日本スポーツ振興センターが設置した組織「国立競技場将来構想有識者会議」が発足。委員長は佐藤禎一（国際医療福祉大学大学院教授（元文部次官））が就いた。メンバーは以下の14名（50音順・敬称略）。安西祐一郎（日本学術振興会理事）、安藤忠雄（建築家）、石原慎太郎（都知事）、遠藤利明（2020年オリンピック・パラリンピック日本招致議員連盟幹事長、衆議院議員）、小倉純二（日本サッカー協会会長）、河野洋平（日本陸上競技連盟会長）、佐藤禎一（国際医療福祉大学大学院教授）、鈴木寛（スポーツ議員連盟幹事長、参議院議員）、鈴木秀典（日本アンチ・ドーピング機構会長）、竹田恆和（日本オリンピック委員会会長）、張富士夫（日本体育協会会長）、都倉俊一（作曲家、日本音楽著作権協会会長）、鳥原光憲（日本障害者スポーツ協会会長）、森喜朗（日本ラグビーフットボール協会会長、衆議院議員）。同日の第1回会議（非公開・議事録も非公開）で、改築に向けて、8万人を収容できる全天候型のスタジアム、陸上競技と球技が行える施設、コンサートなど文化の発信も可能な施設、大規模災害時の帰宅難民らの避難場所、これらを柱に国際オリンピック委員会（IOC）への立候補ファイルの提出締切日（2013年1月）までに改築の正式計画を策定することを目標にする。
2012.7.13	第2回有識者会議開催。新競技場の概要計画を決定。計画内容は以下のとおり。 ・現在の約5万4000人収容から8万人収容に増設 ・開閉式の屋根を備えた全天候型のドーム型スタジアム ・9レーンのトラックを敷設して国際基準を満たす ・競技場周辺の都立明治公園や日本青年館まで敷地を広げてサブトラックを敷設 ・観客席の一部を可動式にしてサッカーやラグビー大会の際は球技専用スタジアムとして使用 ・飲食・物販施設、音響、照明設備の強化 ・コンサートや展覧会、ファッションショーなどの会場としても使用 ・大規模災害時の広域避難場所としての役割
2012.7.20	日本スポーツ振興センターは「新国立競技場」（仮称）デザインの国際設計競技の詳細を発表し公募を開始。審査委員会 安藤忠雄（委員長）、鈴木博之（青山学院大学教授）、岸井隆幸（日本大学教授）、内藤廣（東京大学名誉教授）、安岡正人（東京大学名誉教授）、リチャード・ロジャース（建築家）、ノーマン・フォスター（建築家）、小倉純二（日本サッカー協会名誉会長）、都倉俊一（作曲家）、主催者：河野一郎（日本スポーツ振興センター理事長）、アドバイザー：和田章（東京工業大学名誉教授）が就任。（敬称略）

年月日	事 項
2012.9.25	「新国立競技場」(仮称) デザインの国際設計競技応募締切 国内12点、海外34点の計46作品が集まる。
2012.10.16	「新国立競技場基本構想国際デザイン・コンクール」審査委員会開催。最終審査に11点が残る。
2012.11.15	11月7日に行われた「新国立競技場基本構想国際デザイン・コンクール」審査委員会の審査結果を受け、第3回有識者会議を開催し、最終審査結果を決定。イギリスの建築設計事務所ザハ・ハディド・アーキテクツのデザインが最優秀賞、オーストラリアのクックス・アーキテクチャーが優秀賞、日本のSANAAおよび日建設計が入選。ザハ・ハディドには賞金の2000万円が贈られ、基本設計、実施設計、施工のそれぞれの段階で監修に当たることになる。
2013.5.17	東京都は第201回都市計画審議会にて、新国立競技場建て替えの取り組みが本格化したことを契機に、東京都港区、新宿区、渋谷区にまたがる約64ha(東京体育館や国立競技場のほか、青山通りから絵画館に向けて約300m、左右2列に延びるイチョウ並木も含む)を対象に再整備を決定。都は風致地区として建築物の高さが原則15m以下に規制されている現国立競技場の周辺の13haについて、高さ制限を75m以下に緩和する計画を決定。
2013.5.20	日本スポーツ振興センターは公募型プロポーザルにより(2013.3.1公告)、日建設計・梓設計・日本設計・オーヴ・アラップ・アンド・パートナーズ・ジャパン・リミテッドJVをフレームワーク設計者に特定。履行期限は2013.9.30
2013.8.15	槇文彦氏の論考「新国立競技場案を神宮外苑の歴史的文脈から考える」が『JIA MAGAZINE』295号に掲載、大きな反響を呼ぶ。
2013.8.22	日本スポーツ振興センターは、公募型プロポーザルにより(2013.6.4公告)「新国立競技場等整備に係る発注者支援業務(平成25年度)」を山下設計・山下ピー・エム・コンサルタンツ・建設技術研究所JVを特定。同JVには、構造アドバイザーとして川口衛(法政大学名誉教授)、環境アドバイザーとして尾島俊雄(早稲田大学名誉教授)が参画。発注者支援として、新国立競技場をはじめ、関連施設、関連敷地を含む環境整備にかかわる設計業務の技術的確認などを担う。履行期限は2014.3.31 (敬称略)
2013.9.7	2020年オリンピック・パラリンピック競技大会開催都市が東京に決定。
2013.10.11	日本青年館中ホールにてシンポジウム「新国立競技場案を神宮外苑の歴史的文脈から考える」開催。パネリスト：槇文彦、陣内秀信、宮台真司、大野秀敏、司会：古市徹雄、進行：元倉真琴 (敬称略)
2013.11.7	槇文彦氏を代表に25名が「新国立競技場に関する要望書」および「意見書」を文部科学大臣および東京都知事宛に提出。8日に日本スポーツ振興センター理事長宛に同様の要望書と意見書を提出。計画条件の見直しを求める。その後他団体からも建設見直しを求める要望書が提出される。
2013.11.11	公益社団法人日本建築家協会と他建築関連団体は建築関連5団体として共同で「新国立競技場計画に対する要望書」を文部科学大臣、東京都知事および日本スポーツ振興センター理事長宛提出。
2013.11.25	「神宮外苑と国立競技場を未来へ手わたす会(共同代表・森まゆみ)」が主催した新国立競技場の計画見直しを求める公開座談会が日本建築家協会ホールで開催。発言者：森まゆみ(司会)、松隈洋、藤本昌也、日置雅晴、平良敬一、渡辺邦夫、森山高至 (敬称略)
2013.11.26	第4回有識者会議。フレームワーク設計による基本設計条件が了承される。 基本設計案は、入選案を生かしながらコンパクト化し、29万m ² だった総床面積を約2割縮小し22万m ² にすることが決定。高さは神宮外苑側で67メートル、外苑西通り側で75メートル。収容人数は、当初の計画通り8万人。総工費の見積り額は約1,800億円。開閉式の屋根については、計画を維持することに決定。 ザハ・ハディド・アーキテクツがデザインを監修し、基本設計はフレームワーク設計に引き続き、日建設計・梓設計・日本設計・オーヴ・アラップ・アンド・パートナーズ・ジャパン・リミテッドJVに委託予定。 2014年4月から実施設計に入る予定。工期は2014年7月から既存施設を解体し、本体工事は2015年10月に着手、2019年3月に完成予定。まずラグビーワールドカップ(2019年9～10月)の主会場に使用。 施設規模については、基本設計で今後も諸室規模の精査や専用室の共用化、各競技団体との調整により継続検討される予定。
2013.12.9	「新国立競技場基本構想国際デザイン・コンクール」で審査委員を務めた内藤廣氏が、新国立競技場の議論に対して自らのHPで意見「建築家諸氏へ」を表明。

書籍紹介

『新国立競技場、何が問題か 外苑の17日間と100年間』(仮)

槇文彦ほか著 平凡社刊 刊行予定日：2月13日 予価：1,260円
B6判、並製、160ページ

誰のための建築か？ 建築と市民、そして建築家のあり方を問い直す。
本誌でもこれまで取り上げてきた、新国立競技場案についての問題点を追求した1冊です。

日本スポーツ振興センターのHPに
「新国立競技場基本設計条件(案)」が公開されています
<http://www.jpnspport.go.jp/newstadium/>

2013年度「日本建築家協会優秀建築選100作品」

2013年度の「日本建築大賞」「日本建築家協会賞」「日本建築家協会優秀建築選」に、221作品のご応募をいただきました。

その中から、日本建築家協会優秀建築選100作品が、三宅理一（藤女子大学）、大森晃彦（建築メディア研究所）、長谷川逸子（長谷川逸子・建築計画工房）の審査員3氏によって選出されました。

また、2月2日(日)には、「日本建築大賞・日本建築家協会賞公開審査」が行われ、日本建築大賞と日本建築家協会賞が決定します。

受賞作品は301号（2・3月合併号）でご紹介します。

作品名	氏名	所属先
WOOD（ずだじこども園）	鈴木幸治	(株)ナウハウス
楢田の森	中原祐二	(有)中原祐二建築設計事務所
東京駅丸の内駅舎保存・復原	鎌田雅己	東日本旅客鉄道(株)
	前田厚雄 田原幸夫	(株)ジェイアール東日本建築設計事務所
共働学舎新得農場男子寮	川人洋志	川人建築設計事務所
式年遷宮記念 せんぐう館	栗生 明 岩佐達雄 大野文也	(株)栗生総合計画事務所
	北川典義 松枝俊之	
ゆいま〜る那須	瀬戸健似 近藤創順	(株)プラスニューオフィス
Natural Sticks II	遠藤政樹	EDH 遠藤設計室／千葉工業大学
六町ミュージアム・フローラ	横河 健	(株)横河設計工房
二本松市立とうわこども園	辺見美津男	(有)辺見美津男設計室
こもれびの舎保育園	佐々木信明	Inter Media 一級建築士事務所
伯翠荘	吉村篤一	建築環境研究所
太子町立斑鳩小学校屋内運動場「太子の杜」	坂本 昭	坂本昭・設計工房 CASA
愛知県歯科医師会館	降旗範行	(株)山下設計
ともだちの森保育園	戸室太一	戸室太一建築設計室
茶屋が坂の家	近藤哲雄	(株)近藤哲雄建築設計事務所
FLAP	土井一秀	土井一秀建築設計事務所
阿波町の家	岸本貴信	一級建築士事務所 CONTAINER DESIGN
八戸ポータルミュージアムはっち	針生承一 若松信行 前田 卓	針生承一建築研究所・アトリエ ノルド・アトリエタック設計共 同体
まちの工房 まどか	針生承一	(株)針生承一建築研究所
日本体育大学 東京世田谷キャンパス	田村幸俊 益子保朝 横田 順	(株)久米設計
帝京平成大学中野キャンパス	小泉 治 安本高士 青木 潤	(株)日本設計
曙ブレーキ工業 グローバル研修センター 「Ai-Village」	大江 匡 来海忠男 坂井大輔 栗田清貴	(株)プランテック総合計画事務所
認定こども園エンゼル	大江 匡 来海忠男 幸山真也	(株)プランテック総合計画事務所
スタンレー電気本社ビル	大江 匡 来海忠男 松本秀樹	(株)プランテック総合計画事務所
	渋谷 学 栗田 献	
GrandBlue	末松信吾	エス・エヌ・ジー デザイン
愛知産業大学 言語・情報共有センター	栗原健太郎 岩月美穂	studio velocity 一級建築士事 務所
空の見える下階と 街のような上階	栗原健太郎 岩月美穂	studio velocity 一級建築士事 務所
まちに森をつくる家	栗原健太郎 岩月美穂	studio velocity 一級建築士事 務所
一橋大学空手道場	木下昌大	KINO architects

作品名	氏名	所属先
A邸：薩摩の家	柳瀬真澄	柳瀬真澄建築設計工房
湯平の家	柳瀬真澄	柳瀬真澄建築設計工房
かざぐるまの家	末廣宣子	(有)エヌ・ケイ・エス・アーキテ クツ
	末廣香織	九州大学大学院
浜松信用金庫 高丘支店	葛原定次 塩田哲也 鳥海宏太	(株)日建設計
さざなみの森	竹原義二	無有建築工房
CAMP SHIMIZU	宮崎正之	(株)エー・ジー総合設計
社会福祉法人 延寿会 アリスとテレス	坂牛 卓	坂牛卓一級建築士事務所
	竹内宏俊	O.F.D.A.
	金箱温春	金箱構造設計事務所
豊後高田市立図書館	益子一彦	(株)三上建築事務所
伊達市立保原小学校	大野秀敏	(株)アブルデザインワークショップ
	吉田明弘	(株)ヨシダデザインワークショップ
	山本真也	(株)アブルデザインワークショップ
大多喜町役場	千葉 学	東京大学／(株)千葉学建築計画事 務所
九州芸文館アネックス 1	末光陽子 末光弘和	末光弘和＋末光陽子／(株)SUEP
愛宕山の家／グラスハウス #2	中村 晃	(株)アーキプラス一級建築士事務所
中之島フェスティバルタワー	江副敏史 中島 究 山本武志 甲 勝之 若江直生	(株)日建設計
茶屋町ガーデンビル	大谷弘明	(株)日建設計
梅田阪急ビル	塩井保則 一階聡之 浦井雅昭	(株)日建設計
関西外国語大学中宮キャンパス インターナショナル・ コミュニケーション・センター	勝山太郎 若江直生	(株)日建設計
聖マリアハートクリニック	村上晶子	(株)村上晶子アトリエ／明星大学
Shore house	原田真宏 原田麻魚	MOUNT FUJI ARCHITECTS STUDIO
一宮市尾張一宮駅前ビル	安田俊也 窪田 研 篠崎亮平	(株)山下設計
宇土市立宇土小学校	小嶋一浩 赤松佳珠子	(株)シーラカンサンドアソシエ イツ
	新谷真人	(株)オーク構造設計
本宮保育園	谷重義行	谷重義行＋建築像景研究室
YKK AP 埼玉窓工場	山口広嗣 宮下信顕	(株)竹中工務店
	大野秀敏	(株)アブルデザインワークショップ
	吉田明弘	(株)ヨシダデザインワークショップ
西調布の家	加藤詞史	(株)加藤建築設計事務所
明治学院大学 13号館	島崎義治	(株)島崎義治建築設計事務所
	瀧根正温 小川浩平	清水建設(株)一級建築士事務所
津屋崎海岸のスタジオハウス	矢作昌生	矢作昌生建築設計事務所

2013年度「日本建築家協会優秀建築選100作品」

作品名	氏名	所属先
GRAZ	中村拓志	(株) NAP 建築設計事務所
Sayama Lakeside Cemetery Park Community Hall	中村拓志	(株) NAP 建築設計事務所
深川不動堂	玉置 順	一級建築士事務所 玉置アトリエ
由比ヶ浜の家 スパイラルルーフ	工藤宏仁	工藤宏仁建築設計事務所
長楽寺禅堂	桑原裕彰 葛 和久	(株) 竹中工務店
摂南大学枚方キャンパス 7 号館	大橋 航	(株) 石本建築事務所
獨協大学学生センター	佐藤 維 浜橋 正	(株) 石本建築事務所
大田区総合体育館	能勢修治 金井 淳 松田修平 原健一郎 藤田 貢	(株) 石本建築事務所
大正大学 3 号館	能勢修治 小野寺伸一 松田修平	(株) 石本建築事務所
大山の家—森の隙間—	河口佳介	河口佳介 +K2-DESIGN
水の町屋七日町御殿堰	本間利雄	(株) 本間利雄設計事務所
実践学園中学・高等学校 自由学習館	古谷誠章 八木佐千子	早稲田大学 (有) ナスカ
熊本市医師会館・看護専門学校	古谷誠章 八木佐千子	早稲田大学 (有) ナスカ
LUPICIA 滋賀水口工場	古谷誠章 八木佐千子	早稲田大学 (有) ナスカ
東京国際フランス学園	赤堀 忍 藤沼 傑	(株) イトレス & ACD 一級建築士事務所 (株) 山下設計
四季の家	松山将勝	(株) 松山建築設計室
木箱・深大寺 56/100	葛西 潔	葛西潔建築設計事務所
久山のバス停	松岡恭子	(株) スピングラス・アーキテクト
森の階調	浅野言朗	(有) 浅野言朗建築設計事務所
奈良町宿「紀寺の家」	藤岡龍介	藤岡建築研究室
星のや 竹富島	東 利恵 長谷川浩己	(有) 東環境・建築研究所 (有) オンサイト計画設計事務所
新議員会館（衆議院・参議院）	亀井忠夫 岡田新一 鯉坂 徹 鬼澤仁志 谷口強志 崎山 茂	(株) 日建設計 (株) 岡田新一設計事務所 (株) 三菱地所設計 (株) 久米設計 (株) 日本設計
押上駅前自転車駐車場	土屋 中 土屋哲夫	(株) 日建設計
東京スカイツリー® 東京スカイツリータウン®	亀井忠夫 慶伊道夫 吉野 繁 土屋哲夫 小西厚夫 土屋 中	(株) 日建設計 (株) 日建設計（現エードス） (株) 日建設計
九電エアカデミー 朋学庵	妹尾賢二 吉生 寛	(株) 日建設計

作品名	氏名	所属先
渋谷ヒカリエ	宮川 浩 吉野 繁 小嶋 隆 西岡理郎	(株) 日建設計
	酒井 誠 遠藤郁郎	(株) 東急設計コンサルタント
横浜三井ビルディング	亀井忠夫 中村晃子	(株) 日建設計
PATIO	矢板久明 矢板直子	(株) 矢板建築設計研究所
埼玉県東部地域振興ふれあい 拠点施設 (愛称：ふれあいキューブ)	安田俊也 原田 聡 塩手博道 松村佳明	(株) 山下設計
帝京大学総合武道館	松原和彦 松村佳明 齋藤貴之 前川 歩	(株) NTT ファシリティーズ 元(株) NTT ファシリティーズ（国立文化財機構奈良文化財研究所）
近畿大学 33 号館（建築学部）	畠山文聡 松浦裕己 伊藤裕也	(株) NTT ファシリティーズ
JA 東京むさし本店	丸目明寛 宇川雅之	(株) 久米設計
山梨県立図書館	野口秀世 芝田義治 宇川雅之 三宅勝志 小澤和稔	(株) 久米設計 (株) 三宅建築設計事務所
中央区立中央小学校・ 中央幼稚園	小牧実豊 藤森慶弘	(株) 久米設計
アース・ブリックス	山下保博	(株) アトリエ・天工人
バウンダリー・ハウス	山下保博	(株) アトリエ・天工人
味の素スタジアム西競技場	竹林正彦	(株) 日本設計
広島市立広島特別支援学校	井下仁史 前田英男	(株) 佐藤総合計画
千葉大学 アカデミック・リンク	鳴海雅人 渡辺 猛 松本 健 牛込具之	(株) 佐藤総合計画
新潟市江南区文化会館	新居千秋	(株) 新居千秋都市建築設計
丸の内永楽ビルディング	大内政男 大草徹也 小西隆文 田村浩之	(株) 三菱地所設計
新宿イーストサイドスクエア	渡邊顕彦 松井章一郎	(株) 三菱地所設計
熊本西区役所	柏尾 栄 野嶋 敏	(株) 三菱地所設計
JP タワー	岩井光男 佐藤和清 小川一郎 隈 研吾 宮地弘毅 宮城俊作	元(株) 三菱地所設計 (株) 三菱地所設計 東京大学 (株) 三菱地所設計 設計組織ブレイスメディア
明治安田生命新東陽町ビル	菅 順二 帽田秀樹	(株) 竹中工務店
鹿嶋の研修所	堀部安嗣	一級建築士事務所(有) 堀部安嗣建築設計事務所

（登録順、氏名・所属先は応募当時のものです）

2014年1月15日

公益社団法人日本建築家協会 2014年度 本部役員候補者選挙について (第2回告示)

公益社団法人日本建築家協会
選挙管理委員会
委員長 伊平則夫

2014年度本部役員候補者選挙に関し、昨年12月20日の締切日までに下記の方々から立候補の届け出がなされました。

下記すべての方々はJIA役員候補者選挙規程並びに選挙規程細則に適合しておりますので、候補者名簿に登録しました。その結果、会長候補者、支部長候補者、理事候補者及び監事候補者についてはいずれも立候補者数が定数と同じですので、投票は行わず、役員候補者選挙規程第11条2項の規程により全員が選出されたこととなります。

〈会長候補者〉		芦原太郎
〈理事候補者〉		
北海道支部	(理事・支部長／定数1)	上遠野 克
東北支部	(理事・支部長／定数1)	辺見美津男
関東甲信越支部	(理事・支部長／定数1)	上浪 寛
	(理事／定数3)	千葉 学、森 暢郎、岩村和夫
東海支部	(理事・支部長／定数1)	石田 壽
	(理事／定数1)	鳥居久保
近畿支部	(理事・支部長／定数1)	松本敏夫
	(理事／定数1)	吉田文男
中国支部	(理事・支部長／定数1)	龜谷 清
四国支部	(理事・支部長／定数1)	野村正人
九州支部	(理事・支部長／定数1)	角銅剛太
〈監事候補者〉		
	(定数1)	山本光良

上記複数の場合は届出順

理事会報告

第216回 理事会速報

●日 時：2013年12月19日(木) 13時30分～16時55分

●場 所：建築家会館1階大ホール

【審議事項】

1. 入退会承認の件
入会26名(正会員8名、ジュニア会員3名、学生会員1名、個人協力会員1名、法人協力会員13名)、会員種別移行939名(専門会員7名、シニア会員2名、ジュニア会員55名、学生会員11名、個人協力会員13名、法人協力会員851名)、退会2名(正会員)、死亡退会3名につき、全会一致で承認された。また、既退会者でシニア会員としての会員資格を満たしている者について、過渡期として一定期間シニア会員としての入会を認めることとした。
2. 委員会の委員承認の件
職能・資格制度委員会1名、国際交流委員会2名の委員委嘱につき、全会一致で承認となった。
3. 委員会改廃の件
新委員会体制に伴い、研究・教育委員会、表彰委員会、文化・交流委員会、国際委員会が新委員会への業務移管により、解散することが全会一致で承認となった。
4. 委員会規定改正の件(全国会議を含む)
委員会再編の状況報告に続いて、委員会規定の改正につき審議が行われ、全国会議を盛り込んだ委員会規程案の一部を修正して、全会一致で承認となった。

【報告事項】

1. 国際交流委員会報告
岩村国際交流委員会委員長からJIAにおける国際活動の再編の提案として、支部の国際活動支援に関する考え方、個別案件に関する考え方など国際活動の今後の基本的方針につき報告が行われた。
2. フェローシップ委員会報告
道家フェローシップ委員会委員長から会員増強の各支部別目標、

フレッシュマンセミナーの試行、会員証の発行等及びフェロー会員の基準の試案の考え方等につき報告が行われた。

3. フィリピン台風被害支援について
事務局からフィリピンの台風被害支援について、ARCASIAで計画している寄付募集計画の報告及びそれに対するJIAの対応について、税金の問題を含め会員へ募金を募ることについて検討している旨報告が行われた。
4. 第2四半期決算報告及び2014年度予算案作成方針について
事務局から第2四半期決算についての報告及び2014年度事業計画案及び予算案については各支部役員会を経て2月10日までに提出いただくよう各支部・地域会にお願いしていることにつき報告が行われた。
また、事業管理連絡票の作成及び公益活動の事業把握のアンケートを作成中で、今後事業管理連絡票及びアンケートをお願いすることとなる旨報告が行われた。
5. 後援名義承認の件(会長専決分)
事務局から会長専決事項の後援名義使用について、報告が行われた。
6. JIA ゴールデンキューブ賞について
鳥居東海支部長からJIA ゴールデンキューブ賞の取り組みとその状況について報告が行われた。
7. 保存問題大会について
赤羽理事から関東甲信越支部の保存問題大会(於：長野・2月15・16日)の開催について報告と、参加要請が行われた。
8. インターンシップの件
筒井専務理事からフランスからのインターンシップの学生が日本の事務所(会員外)との間でトラブルとなった件につき報告が行われた。
9. 建築士法改正についての共同提案について
芦原会長から建築士法改正について、建築三会(日本建築士会連合会、日本建築士事務所協会連合会、日本建築家協会)の共同提案について報告が行われた。

2013年度 日本建築家協会優秀建築選 公開審査会を開催します

2005年の賞創設から毎年恒例の行事となっております、優秀建築選の公開審査が本年も開催されます。公開審査という独特の緊張感の中、日本建築家協会においてその年を代表する作品である日本建築大賞1点と、日本建築家協会賞数点がこの日決定されます。

公開審査終了後に新人賞、25年賞、環境建築賞の受賞作品発表会も行われます。

日 時：2014年2月2日(日)

時間は決定次第HPにてお知らせします。

会 場：建築家会館1階大ホール(渋谷区神宮前2-3-16)

入 場 料：無料(定員100名)

審査委員：三宅理一(藤女子大学)

大森晃彦(建築メディア研究所)

長谷川逸子(長谷川逸子・建築計画工房)

協 賛：建築家会館

参加申込：題名を「公開審査出席」とし、以下のアドレスに、観覧希望者全員のお名前をご連絡ください。

なお、CPD単位 5単位の予定です。(認定申請中)

event@jia.or.jp

候補作品

■東京駅丸の内駅舎保存・復原

鎌田雅己(東日本旅客鉄道)

前田厚雄・田原幸夫(ジェイアール東日本建築設計事務所)

■式年遷宮記念 せんぐう館

栗生 明・岩佐達雄・大野文也・北川典義・松枝俊之

(栗生総合計画事務所)

■六町ミュージアム・フローラ

横河 健(横河設計工房)

■大多喜町役場

千葉 学(東京大学/千葉学建築計画事務所)

■宇土市立宇土小学校

小嶋一浩・赤松佳珠子(シーラカンズアンドアソシエイツ)

新谷真人(オーク構造設計)

■実践学園中学・高等学校 自由学習館

古谷誠章(早稲田大学)

八木佐千子(ナスカ)

■東京スカイツリー® 東京スカイツリータウン®

亀井忠夫・慶伊道夫(現エードス)・吉野 繁・土屋哲夫・

小西厚夫・土屋 中(日建設計)

■バウンダリー・ハウス

山下保博(アトリエ・天工人)

■鹿嶋の研修所

堀部安嗣(堀部安嗣建築設計事務所)

本部便り

● JIA Video Letter 第4号を公開

本部ホームページにて動画広報JIA Video Letterの第4弾として、こどもたち向けの建築・環境教育プログラム「こども空間ワークショップ」のLIVE映像を公開しました。

今後、他にもさまざまな行事の様相を順次公開しますのでご期待下さい。

● 福島地域会が復興庁によるコンテスト

「REVIVE JAPANCUP 2013」に入賞

復興庁の開催する、「新しい東北」の創造、復興に資する有用なプラン・取り組みを全国から募集するコンテスト「REVIVE JAPANCUP 2013」に、東北支部福島地域会が入選を果たしました。

詳細はREVIVE JAPANCUP 2013公式ホームページでご確認下さい。

<http://www.eco-japan-cup.com/inecopro13.html>

■ 正会員新規入会者 承認日：2013年12月19日

東北支部	福島県	高橋岳志	高橋岳志建築設計事務所
関東甲信越支部	東京都	安井幹人	(株)日総建
関東甲信越支部	東京都	今村創平	千葉工業大学建築都市環境学科
関東甲信越支部	東京都	水谷俊博	水谷俊博建築設計事務所一級建築士事務所
中国支部	島根県	渡邊元文	渡邊建築工房(株)
中国支部	岡山県	塚本雅久	塚本雅久建築設計事務所
四国支部	徳島県	廣瀬諭志	廣瀬諭志建築設計事務所
海外	英国	内山美之	Zaha Hadid Architects

編集後記

『JIA MAGAZINE』

編集長

古市徹雄

2014年、明けましておめでとうございます。

この3月で東日本大震災から、はや3年になります。

福島原発も東北の復興も一向に進まない中、何かそれらの問題が人々の意識から遠のいていっているような感じがします。にぎやかな正月番組を見ている、ほとんど話題にも出てきませんでした。ニュースでも他のメディアでも取り上げられることがめっきり減ったような気がします。ニュースとは商品であり資本主義競争社会の中では報道といえども例外たり得ないのかもしれないかもしれません。

東京オリンピックを福島の原発問題の解決、東北の復興のシンボルにしようと発言している人がいましたが、とんでもない話です。2020年、6年後にそれらが解決するはずはありません。

日本社会はこれから1964年東京オリンピック時代に作った大量のインフラのRepair時代に入ります。2020年のオリンピック施設群もその意味ではRepairのモデルとなるべきなのでしょう。それがこれからの地球環境に優しい建築・都市のあり方を示すことにもなると思います。

訂正

『JIA MAGAZINE』299号に掲載されました「なぜ今、良質な建築・まちづくり機構が必要なのか」の中で、以下の誤りがありました。

p.14 連健夫氏のプロフィール

誤) 港区認定まちづくりコンサル
タント

正) 港区登録まちづくりコンサル
タント

訂正してお詫び申し上げます。

『JIA MAGAZINE』はJIAのHP上でPDFでもご覧いただけます。次号301号は2・3月合併号になります。(2014年3月発行予定)

■ JIA 支部一覧

■ 北海道支部

〒060-0061

北海道札幌市中央区南1条西8丁目14-3 札幌第2スカイビル5F

TEL 011-261-7708 FAX 011-251-4866

URL <http://www.jia-hok.org/>

■ 東北支部

〒980-0802

宮城県仙台市青葉区二日町17-21 北四ビル3F

TEL 022-225-1120 FAX 022-213-2077

URL <http://www.jia-tohoku.org/>

■ 関東甲信越支部

〒150-0001

東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館4F

TEL 03-3408-8291 FAX 03-3408-8294

URL <http://www.jia-kanto.org/members/>

■ 東海支部

〒460-0008

愛知県名古屋市中区栄4-3-26 昭和ビル

TEL 052-263-4636 FAX 052-251-8495

URL <http://www.jia-tokai.org/>

■ 北陸支部

〒920-0805

石川県金沢市小町3-31

TEL 076-229-7207 FAX 076-229-7208

URL <http://www.jia-hokuriku.org/>

■ 近畿支部

〒541-0051

大阪府大阪市中央区備後町2-5-8 綿業会館4F

TEL 06-6229-3371 FAX 06-6229-3374

URL <http://www.jia.or.jp/kinki/>

■ 中国支部

〒730-0013

広島県広島市中区八丁堀5-23 オガワビル

TEL 082-222-8810 FAX 082-222-8755

URL <http://www.jia-chugk.org/>

■ 四国支部

〒780-0084

高知県高知市南御座16-23

TEL 088-885-6688 FAX 088-855-6260

URL <http://www.jia-shikoku.org/>

■ 九州支部

〒810-0022

福岡県福岡市中央区薬院1-4-8 あずまビル2F

TEL 092-761-5267 FAX 092-752-2378

URL <http://www.jia-9.org/info/>

■ 沖縄支部

〒900-0014

沖縄県那覇市松尾1-12-8 松尾ハウス6F

TEL 098-941-1064 FAX 098-941-1079

URL <http://www.jia-okinawa.org/>

JIA MAGAZINE 2014年1月号

通巻300号

2014年1月15日発行(毎月1回発行)

販売価格500円(本体477円、消費税23円)

会員の購読料は会費に含まれます。

発行人/筒井信也

編集長/古市徹雄

編集・制作/南風舎

発行所 公益社団法人 日本建築家協会 (JIA)

〒150-0001

東京都渋谷区神宮前2-3-18 JIA館

TEL 03-3408-7125

FAX 03-3408-7129

©公益社団法人 日本建築家協会

6月15日は建築家の日

<http://www.jia.or.jp>



The Japan Institute of Architects
JIA-kan, 2-3-18 Jingumae, Shibuya-ku,
Tokyo 150-0001 Japan

CAD およびビルディング インフォメーション モデリング (BIM)用の建築設計ソフトウェア

AUTODESK® BUILDING DESIGN SUITE 2014

Autodesk® Building Design Suite は、ビルディング インフォメーション モデリング(BIM) ツールと CAD ツールを組み合わせ、より効率的な設計、ビジュアライズ、シミュレーションを実現する 3D 建築設計ソフトウェアのポートフォリオを提供します。説得力のあるビジュアライゼーションを生成し、統合されたシミュレーションと解析を行う事で、より高品質な施工ドキュメントを作成し、プロジェクトの成果をより良く管理することができます。

Standard、Premium 及び Ultimate の 3 エディションの中から、お客様のご用途にあった最適なエディションをお選びください。3 エディションはすべて、建物のライフサイクルを通じたソリューションを安価でありながらコスト効果の高い便利なひとつのパッケージでお届けします。

Autodesk® Building Design Suite Premium

Standard エディションの全機能に加え、説得力のある建築設計のビジュアライゼーションを作成できるツールを備えています。

Autodesk® Building Design Suite Standard

ビルディング インフォメーション モデリング(BIM) と CAD のワークフローのための基本的なツールセットで、効率的に図面を設計、ドキュメント化、共有できます。

Autodesk® Building Design Suite Ultimate

Premium の全機能に加え、3D 建築設計および施工向けの高度で包括的なツールセットを入手いただけます。

Suite に含まれるソフトウェア	Standard	Premium	Ultimate
AutoCAD®	●	●	●
AutoCAD® Architecture	●	●	●
AutoCAD® MEP (英語)	●	●	●
AutoCAD® Structural Detailing (英語)	●	●	●
Autodesk® Showcase®	●	●	●
Autodesk® SketchBook® Designer	●	●	●
AutoCAD® Raster Design	●	●	●
Autodesk® ReCap™	●	●	●
Autodesk® 3ds Max® Design		●	●
Autodesk® Navisworks® Simulate		●	
Autodesk® Navisworks® Manage			●
Autodesk® Revit®		●	●
Autodesk® Inventor®			●
Autodesk® Robot® Structural Analysis Professional			●
Autodesk® InfraWorks			●

Autodesk® Building Design Suite 2014
Premium コマーシャル新規

希望小売価格

¥ 997,500 [※] (税込)

製品に関する詳細は

www.autodesk.co.jp/buildingdesignsuite

建築・公共・土木ソリューション ウェビナーのご案内

2013 年にオートデスクで行われた 2 つのセミナーを WEB でご視聴いただくことが可能です。「ユーティリティ関連企業向け オートデスク最新ソリューション」と「Autodesk Solution Day 2013 秋」のご視聴のお申し込み、ワークショップ内容の詳細は下記 URL よりご確認ください。

ユーティリティ関連企業向け
オートデスク最新ソリューション

▶ www.autodesk.co.jp/bim-seminar3

Autodesk Solution Day 2013 秋

▶ www.autodesk.co.jp/bim-seminar4

オートデスク株式会社

Autodesk は、米国およびその他の国々における、Autodesk, Inc.、その子会社、関連会社の登録商標または商標です。その他のすべてのブランド名、製品名、または商標は、それぞれの所有者に帰属します。該当製品およびサービスの提供、機能および価格は、予告なく変更される可能性がありますので予めご了承ください。また、本書には誤植または図表の誤りを含む可能性があります。これに対して当社では責任を負いませんので予めご了承ください。© 2013 Autodesk, Inc. All rights reserved.

※ 2013 年 12 月現在。最新の価格は弊社 Web サイトまたはオートデスク認定販売パートナーにご確認ください。オートデスク認定販売パートナーの販売価格はオートデスク認定販売パートナーが決定します。

 AUTODESK®